



謝 辞

浅野 純次

(経済俱楽部理事)

▼5月末の理事会で理事長を退任しました。2004年1月から9年余り、いい潮時と思っています。この間の講演会は420回、この欄の執筆は113回に及びました。毎回の講師の質については胸を張つていいと思いますが、司会やこの欄の出来はどうだったか。

▼というわけで、最終回は講演と講演録についての裏話です。多少の手前味噌はお許しください。昨年11月号のこの欄で「講演会の内幕」と題して書き記したので補足になります。講演で大事なのは講師とタイミングと演題です。いつも数週間先を想像しつつ講師とテ

憤慨、退席という場面がなかつたのはありがたいことでした。内心ヒヤッとしたことは0・何パーセントかはあつたのですから運がよかつたのでしょう。

▼さて講演をするのはなかなか大変です。講師からたびたび「私の話がこんなにびかぴかになつて」と喜んでいただけことは私のひそかな励み(書いてしまつたのでひそかではなくつてしまつたけれど)でした。どんなふうに出来上がるかといえば、まず速記が上がります。澤記のお嬢さん方の速記の質はいつも最高でした。それを塚田事務局長が三本、私が一本、粗編集して講師に送ります。文字どおり真つ赤に赤字を入れてくる方、削除個所だけの方、中には「一切お任せする」という講師もいます。

▼戻ってきた四本を長時間かけて磨くのが次の仕事です。元は高価で良質なダイヤの原石のようなものですから、磨けば磨くほど光り輝いてくる。まさに研磨士の趣でパソコン上の戦いが始まります。ポイント

一マを考えるのですが、まぐれ当たりもあり、時機はずれもありが実態でした。講演録を見ると、開会の辞で「タイミングは最高で」などと結構しばしば言つてるのは我ながらずつずつしかったかもしません。▼質疑応答は講演の大重要な要素なので、就任早々の2004年4月から始めました。意見や質問が出ないと講師にも申し訳ないので、いつでも私が割つて入るつもりではいました。良い質問をしてもらえたと思うときが多かったです。自分で質問したいのを我慢したことも時折ありました。それにしても老齢の女性講師が以前「質疑なんて失礼だ」と演壇で怒り出したのにはびっくりしました。「質疑」が「疑義」と憤慨したのです。それもあつて少し考え講演録の該当箇所を【質問】から【会員】に変えました。

▼開会、閉会のコメントが染みだと言つてくださる方が少なからずおられたのは司会者冥利に尽きましたが、でも冒頭の講師紹介で舌禍を引き起こして講師が【質問】から【会員】に変えました。

は以下のようなことです。
①わかりやすい表現、文脈にする。
②無駄な文章をそぎ落とす(高率のとおり、言うまでもなく、後ほど触れますけれども、等々は消えていきます)。
③事実関係を確認する(人名、年月、地名など)。
④文頭文末を改善する(接続詞の改善、「思います」「わけです」などが多発する話法の改变など)。
⑤補足(ぶりがな、英語のつづり、語句の説明など)。
⑥長い文を句点で切り、かつ改行を工夫する。

▼これを原稿段階で三回、校正で二回、繰り返し編集しながら進めると、誤植はほぼ消え(ほぼですが、(おおむね)すらすら読める文章になります)。大事なのは講演内容の本質はいつさいじらないこと、講演会の臨場感を大事にすることです。ここまでやれば講演の中身は私の頭に完璧に定着しそうなものですが、研磨士が光り輝くダイヤを手中にしえないと同様、頭の中を素通りしてしまえばかり…。ということで、長い間ご愛読ありがとうございました。